

東日本大震災において被災地派遣された
管理栄養士・栄養士の支援活動における有効点と課題
～被災地側の管理栄養士・栄養士の視点から～

Analysis of the Effective or Problematic Points of Nutrition Support Activities by
Dietitians Dispatched to Areas Affected by the Great East Japan Earthquake

笠岡（坪山）宜代^{1,2}，廣野りえ^{1,3}，高田和子¹

瀧沢あす香^{1,3}，須藤紀子^{2,4}，下浦佳之^{2,5}，迫和子⁵

Nobuyo TSUBOYAMA-KASAOKA^{1,2}，Rie HIRONO^{1,3}，Kazuko ISHIKAWA-TAKATA¹
Asuka TAKIZAWA^{1,3}，Noriko SUDO^{2,4}，Yoshiyuki SHIMOURA^{2,5} and Kazuko SAKO⁵

¹国立研究開発法人 医薬基盤・健康・栄養研究所 国立健康・栄養研究所

National Institute of Health and Nutrition, National Institutes of Biomedical Innovation, Health and Nutrition, Japan

²公益社団法人日本栄養士会災害支援チーム (JDA-DAT) 運営委員会

Committee of JDA-DAT, The Japan Dietetic Association, Japan

³東京家政大学

Tokyo Kasei University, Japan

⁴お茶の水女子大学基幹研究院自然科学系

Natural Science Division, Faculty of Core Research, Ochanomizu University, Japan

⁵公益社団法人日本栄養士会

The Japan Dietetic Association, Japan

要約

被災地へ管理栄養士・栄養士（以下、栄養士）を派遣する際に、有効な活動のあり方を検討するため、派遣栄養士を受け入れる被災地側が感じたことについて解析した。

東日本大震災被災3県（岩手・宮城・福島）の栄養士会会員1,911名を調査対象とし（回収数435名、回収率22.8%）、派遣栄養士と一緒に活動した69名のうち「派遣された管理栄養士・栄養士と活動して有効だったこと、困ったこと」欄の記入者58名を解析対象とした。自由記載をKJ法により解析し、有効点と問題点を抽出した。

有効点として、被災地においても栄養士の「知識・スキルが役立つ」こと、専門職の人的支援は被災地の「心の支え」となることが明らかとなった。一方、問題点として、派遣者の「スキル不足」、「状況把握不足」や「ニーズとのずれ」、受け入れ側の「準備不足」、派遣体制として「活動期間が短く引継ぎが不十分」であったこと等が明らかとなった。また、有効点にも問題点にも「熱意」が抽出され、励みにもなり、負担にもなり得ることが明らかとなった。

派遣される側および受け入れ側双方の平常時からの準備が重要であり、それによって派遣栄養士は被災地ニーズに沿った有効な支援が実施できることが示唆された。

キーワード：東日本大震災、災害派遣、管理栄養士・栄養士、栄養支援

Summary

We analyzed how dietitians in the affected areas felt about dispatched dietitians' activities in order to develop effective nutrition support systems for future disasters.

This study surveyed 1911 registered dietitians and general dietitians in areas affected by the Great East Japan Earthquake. Of the 435 respondents, 58 provided free descriptive answers for "effective or problematic points of support activities by dietitians dispatched from other areas." Their free descriptive answers to this question were then categorized and abstracted using the KJ method, and effective and problematic points were extracted.

責任著者：笠岡（坪山）宜代

連絡先：国立研究開発法人 医薬基盤・健康・栄養研究所 国立健康・栄養研究所

栄養疫学研究部 食事摂取基準研究室

〒162-8636 東京都新宿区戸山 1-23-1

電話：03-3203-5721 Fax：03-3202-3278

E-mail：ntsubo@nih.go.jp

2015年11月20日受付；2016年2月22日受理

Received November 20, 2015; Accepted February 22, 2016

The effective points included the usefulness of the dietitians' skills during disasters and the fact that their assistance provided mental support. The problematic points included the fact that the support provided was not necessarily consistent with needs, operational deficiencies at both the dispatching and receiving sides, and the short period of support coupled with inadequate organization. "Enthusiasm" was regarded as both effective and problematic. Enthusiasm can prove to be a source of encouragement as well as a burden.

These results suggest the need to modify the systems on both dispatching and receiving sides. Under these circumstances, effective communication is essential, and it is important for the dispatched dietitians to fully understand the feelings and needs of the dietitians in the affected areas. When this is achieved, they can work together effectively in the case of future disasters.

Keywords: Great East Japan Earthquake, disaster dispatch, dietitian, nutrition support activity

1. 緒言

東日本大震災では、食料の不足により避難所の食事に偏りが生じた¹⁾。被災者の長期的な栄養不足を回避する事を目的として厚生労働省では、全国の自治体から管理栄養士の派遣を斡旋・調整した。さらに、公益社団法人日本栄養士会(当時の社団法人日本栄養士会。以下、日本栄養士会と称す)に対し被災地へ管理栄養士・栄養士(以下、栄養士と称す)の派遣を依頼した。自治体および栄養士会等からの派遣は8月までの5か月間で約600名(自治体派遣194名、栄養士会からのボランティア派遣406名)であり、現地にて支援活動を行った^{2,3)}。全国規模で栄養士が被災地へ派遣されるのは初めての取り組みであった³⁾。実際に、日本栄養士会から派遣された栄養士が提出した活動報告書を解析した研究から、派遣された栄養士は食事と栄養に関するアセスメントを行い、被災者の栄養支援活動を行っていた事が報告されている⁴⁾。さらに、日本栄養士会から派遣された栄養士が被災地活動において感じた「思い」を分析した研究では、派遣された栄養士が感じたこと、必要だと思った事項を報告している⁵⁾。しかしながら、派遣された栄養士を受け入れる被災地側から見た場合の、外部からの支援活動の有効点や問題点については明らかになっていない。

そこで本研究では、災害派遣栄養士を受け入れた被災地側の栄養士からの意見を質的研究法を用いて分析し、災害時の栄養専門職派遣の実態を導き出す試みを行った。被災地側の意見をもとに災害派遣活動の実態を明らかにすることで、大規模災害の際に、他の地域からの派遣栄養士と被災地域の栄養士が協力してより有効な栄養の支援を実施するための課題を明確にすることを目的とした。

2. 方法

(1) 調査対象

日本栄養士会の協力を得て、会員データベースより抽出された、公益社団法人岩手県栄養士会および公益社団法人宮城県栄養士会、公益社団法人福島県栄養士会の全会員1,911名を調査対象とした。

(2) 調査方法

対象者に対し、日本栄養士会が日本栄養士会雑誌と一緒に、調査票を送付し回収した(調査期間:2012年8月~10月)。

(3) 解析方法

全11ページにわたる調査票の質問項目のうち、「①被災時に県や日本栄養士会から派遣された管理栄養士・栄養士と一緒に活動をしましたか。」の設問に「一緒に活動をした」と答えた者のうち、「②一緒に活動をして有効だったこと、困ったこと」についての自由記載に回答した者を解析対象とした。自由記載はKJ法を用いて分類した。KJ法のソフトは、超発想法Version 3.0(アイテック)を使用した。

KJ法による分類、抽出作業は、自由記載の回答内容を

全て文字化しカードに書き出し、カテゴリー群を作成した。その際、同一人物による回答でも、意味が複数含まれている場合は複数のカードに分けて書き出し、一つのカードに一つの意味が含まれるように留意した。

全ての情報が書かれた多数のカードの中から類似するカードを抽出して小グループを作り、グループ内容を表すタイトルをつけ小カテゴリーとした。小カテゴリーが出来なくなるまで繰り返し実施し、小カテゴリーの中から類似するグループを新たに作成し、中カテゴリーを作成した。各カテゴリーに含まれるカードの数は()内に示した。なお、被災3県で調査した中から、自由記載者の意見を表1および表2に示した。

(4) 倫理的配慮

調査票には、調査依頼書を添付し、調査の目的、任意の調査であること、回答しないことにより不利益を被ることはないこと、調査目的以外には使用しないこと、結果発表時には個人名や組織名が推測できないようにすることを明記した。調査は無記名で実施し、調査票の返信をもって同意が得られたものとした。本調査の実施にあたっては、人権や個人情報に配慮した研究計画書を作成し、独立行政法人国立健康・栄養研究所研究倫理審査委員会(当時)の審査・承認を得て実施した。

3. 結果

調査票は、送付数1,911名、回収数435名(回収率22.8%)であった。回収数435名の中で、「①派遣栄養士と一緒に活動をしましたか?」という質問に対して「一緒に活動をした」と答えた69名(15.9%)のうち、「②一緒に活動をして有効だったこと、困ったこと」についての自由記載の回答があった58名(活動した人の84.1%)を解析対象とした。抽出結果は有効点と問題点に大きく分類された。

(1) 栄養士による災害派遣の有効点

KJ法により抽出された災害派遣栄養士の有効点を表1に示した。有効点として、5件の中カテゴリーが抽出された。「知識・スキルが役立った」(28件)、「精神面で支えられた」(10件)、「マンパワーとして役立った、ありがたかった」(16件)、「情報の入手ができた」(8件)、「勉強・経験・スキルアップになった」(5件)であった。

中カテゴリー「知識・スキルが役立った」の中には、4件の小カテゴリーが含まれ、それぞれ「栄養士としてのスキルが役立った」(19件)、「災害時のスキルが役立った」(5件)、「さまざまな知識が役立った」(3件)、「冷静な判断ができていた」(1件)であった。また、「精神面で支えられた」という中カテゴリーの中には、3件の小カテゴリーが含まれ、それぞれ「熱意がありがたかった」(5件)、「支えとなった」(4件)、「刺激をもらった」(1件)であった

(2) 栄養士による災害派遣の問題点

表 2 に、KJ 法により抽出された災害派遣栄養士の問題点を示した。問題点として、3 件の大カテゴリーが抽出された。「派遣栄養士側の問題点」(21 件)、「派遣体制の問題点」(13 件)、「受け入れ側の問題点」(11 件)であった。

大カテゴリー「派遣栄養士側の問題点」の中には、6 件の中カテゴリーが含まれ、それぞれ「状況把握不足」(6 件)、「熱意が負担」(4 件)、「服装がわかりづらい・被災地にそぐわない」(3 件)、「被災者に寄り添う気持ちがかけていた」(3 件)、「やりたい支援と欲しい支援のずれ」(2 件)、「派遣栄養士のスキル不足」(3 件)であった。中カテゴリー「状況把握不足」の中には、2 件の小カテゴリーが含まれ、それぞれ「状況把握できていない」(4 件)、「勝手に動きをする」(2 件)であった。中カテゴリー「服装」の中には、「栄養士とわかりづらい」(2 件)、「被災地にそぐわない」(1 件)という小カテゴリーが含まれていた。

一方、大カテゴリー「受け入れ側の問題点」の中には、3 件の中カテゴリーが含まれ、それぞれ「受け入れ側のスキル不足」(4 件)、「受け入れ体制の不備」(4 件)、「受け入れ側の業務増加」(3 件)であった。

また、大カテゴリー「派遣体制の問題点」の中には、3 件の中カテゴリー「活動期間が短く引継ぎが不十分・継続的な活動ができない」(6 件)、「本部と被災地側の調整が不十分」(5 件)、「マニュアルが欲しかった」(2 件)が含まれていた。

4. 考察

被災地側の栄養士の意見を解析し、災害時に派遣される栄養士の「専門的スキル」は有効であった事が明らかとなった。反面、派遣栄養士側の「災害支援スキル不足」や受け入れ側の「準備不足」、また「短い派遣期間」等派遣体制の不備に関する問題点も抽出された。

派遣された栄養士の「災害支援スキル不足」は大きな問題である。東日本大震災では全国規模で初めて栄養士が派遣されたため、災害に特化した支援活動の準備も、災害時のスキルを有した人材育成も整っていなかった³⁾。実際に派遣された栄養士の「思い」の分析においても、自身のスキル不足や力不足、未経験ゆえの不安な気持ち等が挙げられていた⁵⁾。この問題点を解決するため、既に日本栄養士会では、災害支援チーム JDA-DAT (Japan Dietetic Association-Disaster Assistance Team) を設立している⁶⁾。JDA-DAT の栄養士は、被災地に派遣され、被災地内の医療・福祉・行政栄養部門等と協力して緊急栄養補給物資等の被災者支援を行う。そのため、JDA-DAT 育成研修トレーニングでは、災害に特化した知識およびスキルを身につける事を目的としている。今後は、災害に特化したトレーニングを受けた栄養士が派遣される事で、「災害支援スキル不足」を軽減することが期待できる。しかし一方で、興味深いことに、JDA-DAT 設立前の東日本大震災においても、栄養士が関与した避難所では食事状況が良好であった事例が報告されている。食事状況が悪化する大規模な避難所であっても、栄養士が地域の物資本部に常駐していた場合、また栄養士が避難所の食事を担当していた場合は食事提供状況が良好であった⁷⁾。このことは、災害に特化したスキルだけでなく、栄養士が元来有しているスキルや知識も、いざという災害時に“部分的”に有用であることを示唆している。この栄養士が元来有しているスキルや知識を災害支援に生かすためには、JDA-DAT 等の卒後トレーニングだけでなく、

卒前教育において管理栄養士養成課程で災害に触れる事も望まれる。管理栄養士養成大学において授業で災害について扱っている割合は、給食経営管理論(給食管理)では 94.9%であったが、公衆栄養学(食生活支援)では 80.5%に留まった⁸⁾。特に公衆栄養学では、今後も災害を扱う予定はないと回答した教員が 19.5%存在した。しかし、公衆栄養学実習で災害を扱ったところ、学生からは「災害のことを真剣に考えた」との感想が得られている⁹⁾。卒前教育で災害に触れた経験は、派遣側のみならず被災側になった場合も有用であると考えられる。今後は、栄養士が元来有しているスキルや知識に災害の視点が加わることで、さらに災害に特化したトレーニングにより「災害支援スキル」が加わることで、より効果的な被災者支援が期待される。

また、本研究から、派遣者を受け入れるための「準備不足」である被災地は、スムーズな支援を受けられないことが明らかとなった。被災地を助けるための活動が、反対に被災地側の栄養士の仕事を増やしてしまうケースが存在することも明らかとなった。災害時に派遣者を受け入れる立場となる行政従事者は、今までの災害対策にプラスして、「災害派遣を受ける際のシミュレーション」等も行う必要がある。しかし、2010 年 11 月に、全国の市町村の栄養業務担当者を対象に行った質問紙調査では、「これまでに、災害時の栄養・食生活支援に関する研修や指導を受けたことがありますか」という問いに対し、「ある」と回答した者の割合は 39.6% (513 市町村)にとどまっていた¹⁰⁾。東日本大震災の後に行った同様の調査では、「ある」と回答した者の割合は 53.1% (1,128 市町村)に増加したが、依然として、一般的な災害支援研修であっても半数程度を受講率にとどまっている¹¹⁾。今後、災害時の栄養改善を迅速に行うためにも、特に行政の管理栄養士は、派遣される栄養士としてのスキルを磨くことに加え、受け入れる側である被災地側になった時に備えた準備も必要であることを認識する必要がある。

また、「活動期間の短さ」および被災地の混乱の中でのスムーズな「引継ぎの重要性」が抽出されたことも、今後につながる課題である。同じことが、派遣された側の栄養士の意見からも報告されている⁵⁾。実際に派遣された栄養士の被災地での活動の中で最も多かったのはミーティングであった⁴⁾。この中には引継ぎも含まれていた。ミーティングは情報伝達手段として非常に重要であるが、ミーティングに要する時間を節約できれば、実際の被災者支援活動のための時間を増やすことが出来る。被災地での時間を有効に使うためにも、引継ぎの効率化が求められる。既に、JDA-DAT では、派遣された際の活動記録や議事録の書式を新たに開発し、統一したフォーマットで短時間に整理でき、把握できる仕組みを構築している¹²⁾。これら被災地の情報を正確に伝えることは、本研究において問題点として抽出された「ニーズに沿った支援」をおこなう一助ともなり得る。今後は、より迅速な支援を行うために、新たなフォーマットのオンラインによる情報送信等が必要となると考えられる。さらに、災害コーディネーターを配置する事で、情報伝達を改善できる可能性が考えられる。派遣された栄養士の「思い」の分析においても、コーディネーターの必要性が挙げられていた⁵⁾。被災地の食生活に精通している災害コーディネーターがいることによって、派遣者側と受け入れ側のつなぎ役となり、ニーズに沿った支援が展開されることが推測される。

東日本大震災の経験を経て改善されてきた問題点もあ

るが、現段階においても課題は残っている。今後、さらに被災地ニーズにマッチした栄養支援を行うためには、災害時に迅速に活動できる JDA-DAT メンバーの拡大、平常時のスキルアップを目指した栄養士養成校等での教育内容への組み込み、派遣栄養士側・受け入れ被災地側の双方における災害時のシミュレーションと体制整備等が必要であると考えられる。これにより、災害時に被災地の栄養士と派遣栄養士が有効に連携して被災者の支援を行うことができるようになる。東日本大震災の災害派遣から得られた経験が、将来の災害対応システムの構築に役立つことが期待される。

5. 謝辞

本調査は特定非営利活動法人日本栄養改善学会「東日本大震災にかかる栄養改善活動の支援」の助成金により実施したものです。また、本研究の一部は、JSPS 科研費 15K00868、花王健康科学研究会助成金の助成を受けたものです。ここに記して謝意を表します。

参考文献

- 1) Nobuyo, Tsuboyama-Kasaoka.; Yuko, Hoshi.; Kazue, Onodera.; Shoichi, Mizuno.; Kazuko, Sako. What factors were important for dietary improvement in emergency shelters after the Great East Japan Earthquake? *Asia. Pac. J. Clin. Nutr.* 2014, 23(1), p. 159-166.
- 2) 下浦佳之, 笠岡(坪山)宣代. 自然言語処理技術による管理栄養士・栄養士の災害時支援活動報告の分析. *日本栄養士会雑誌*. 2012, 55(12), p. 936-937.
- 3) “被災地の栄養・食生活支援を例に、実際の対応から、今後の災害対応を考える”. 厚生労働省. http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/chiiki-gyousei_03_08.pdf, (参照 2016-02-16).
- 4) 伊藤聖来, 須藤紀子, 笠岡(坪山)宣代, 岡崎直観, 鍋島啓太, 金谷泰宏, 奥村貴史, 下浦佳之. 東日本大震災後に日本栄養士会から派遣された災害支援管理栄養士・栄養士の支援活動に関する分析. *日本栄養士会雑誌*. 2015, 58(2), p. 111-120.
- 5) 濱口ほゆき, 須藤紀子, 笠岡(坪山)宣代, 金谷泰宏, 下浦佳之. 日本栄養士会が東日本大震災の被災地に派遣した災害支援管理栄養士・栄養士の「思い」の分析. *日本栄養士会雑誌*. 2015, 58(1), p. 35-44.
- 6) Nobuyo, Tsuboyama-Kasaoka.; Martalena, Br Purba. Nutrition and earthquakes: experience and recommendations. *Asia. Pac. J. Clin. Nutr.* 2014, 23(4), p. 505-513.
- 7) 笠岡(坪山)宣代, 星裕子, 小野寺和恵, 岩渕香菜, 泉明那, 斉藤長徳, 西村一弘, 石川祐一, 梶忍, 下浦佳之, 迫和子. 東日本大震災の避難所で食事提供に影響した要因の事例解析. *日本災害食学会誌*. 2014, 1(1), p. 35-43.
- 8) 須藤紀子, 吉池信男. 管理栄養士養成大学における災害時の栄養にかかわる公衆栄養学及び給食経営管理論教育についての全国調査. *栄養学雑誌*. 2012, 70(3), p. 188-196.
- 9) 須藤紀子. 管理栄養士養成大学の公衆栄養学実習における災害時の栄養に関する教育の試み. *日本栄養士会雑誌*. 2012, 55(11), p. 890-899.
- 10) 須藤紀子, 澤口真規子, 吉池信男. 災害時の栄養・食生活支援に対する市町村の準備状況と保健所からの技術的支援に関する全国調査. *日本公衆衛生雑誌*. 2011, 58(10), p. 895-902.
- 11) 伊藤聖来, 須藤紀子, 笠岡(坪山)宣代, 山田佳奈実, 山村浩二, 山下雅世, 山本真由美, 下浦佳之, 小松龍史. 災害時の栄養・食生活支援に対する自治体の準備状況等に関する全国調査—人材育成と支援体制構築について—. *日本栄養士会雑誌*. 2015, 58(12), p. 887-895.
- 12) 甲斐美咲, 須藤紀子, 笠岡(坪山)宣代, 尾崎文子, 下浦佳之. 日本栄養士会災害支援チーム (JDA-DAT) が使用する活動記録票・議事録用紙の検討. *日本栄養士会雑誌*. 2016, 59(2), p. 97-106.

表 1. 被災地派遣された管理栄養士・栄養士の支援活動における有効点

		カテゴリに分類されたカードの例			
中カテゴリ	小カテゴリ	岩手県	宮城県	福島県	
知識・スキルが役立った(28)	栄養士としてのスキルが役立った(19)	○初めての土地でも、テキパキ活動していた、情報収集も上手 ○各職域の栄養士の方々と仮設訪問をし、市民への対応に細やかな配慮等をしてもらい感謝している	○仮設住宅や家庭に訪問し、災害時の食生活等のアドバイスができた	○被災された方々のカウンセリングもとても上手 避難所の食事状況の確認を協力してもらった	
	災害時のスキルが役立った(5)	○被災地での活動のノウハウを持っていた ○以前にもボランティアで活動しており、参 考意見が聞けて大変よかった	○神戸の方だったので震災での対応に慣れていた ○様々な分野で活躍されている方々に支援いただき、 即戦力となった	○被災を受けたことのあるスタッフがいたので、実際の経験から得たものを教えてもらえて勉強になった ○日頃から災害時の栄養、食生活支援について研修を積んでいるようで、作成資料も、住民の方への対応や栄養相談も適切だった	
精神面で支えられた(10)	さまざまな知識が役立った(3)	○さまざまな知識を持つ栄養士の方々の支援が(病院、福祉、行政等)心強かった		○知識が豊富な方と一緒にだったため、とても助かった	
	熱意があった(5)	○冷静に判断できていた ○限られた支援の期間を有効に活動しようとする気概が高かった ○栄養士として何が出るか必死に考えて活動したのはどこから来た方も同じだった			○非常に熱心に栄養指導支援活動を続けて下さり、頭の下がる思いだった
マンパワーが役立った(16)	支えとなった(4)	○初対面でもすぐうちとけて、調理、訪問できたことは、仲間として嬉しかった	○精神的に助けられた。孤立していないという安心感があった ○栄養士の業務の大変さは同じ職種であるからこそ共感してもらい、精神的にも救われた	○被災自治体の栄養士に寄り添う姿勢で接してくれたのでありがたかった	
	刺激をもらった(1)	○刺激をもらいながら仕事をした			
情報の入手ができた(8)	マンパワーとして役立った、ありがたかった(16)	○行政の栄養士の足りないマンパワーを補っていた		○マンパワー不足だったため、管理栄養士・栄養士がきてくれるのはありがたかった ○業務を開始するにあたり、派遣栄養士が来るという点で後押しされた	
	情報の入手ができた(8)	○活動拠点でいろいろと情報交換していた		○色々な情報交換ができた ○他の避難所との違いがあり、各々抱えている問題を把握することができた	
勉強・経験・スキルアップになった(5)				○自分のスキルアップになった ○就職につなげた ○勉強になった ○貴重な経験だった	

カッコ内の数字は各グループに含まれるカードの数を表す。

「-」は関連する記載がなかったことを示す。

